

水尾の伝説



「金の鳥」の伝説

以前、地域の方から、「御陵さんのあたりに金でできた鳥が三体埋まっているという伝説がある」と聞いたことがあります。何か、水尾に大事が起きたとき、これを掘り出すようと先祖からの言い伝えがあるとのこと。この伝説を聞いた丹波(国)の悪者が、夜中にひそかに掘り出しに来た。しかし、この悪者は鍬を振り上げたまま、硬直して死んでいた、と言われています。

埋められている場所については、天皇陵の制札がある辺りともいわれていますが、伝説も含めて真偽のほどは不明とされています。

同じような伝説は「金鶏伝説」として、日本各地にあります。有名なところで言うと、岩手県平泉町にある「金鶏山」です。

松尾芭蕉の『奥の細道』に「三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたに有り。秀衡が跡は田野に成りて、金鶏山のみ形を残す。」と記されていることで知られています。

これは、奥州藤原氏の三代目藤原秀衡が、築かせ、山頂に雄雌一對の金の鶏を埋めたといわれています。実際、当時の奥州は金の産地でもあったことから、このような伝説があっても不思議ではありません。

伝説は何も平泉のような金の産地に限ったものではなく、古墳や塚、山など聖地とされたものに多く埋蔵伝説が残っています。

なぜ、「金の鳥」なのでしょう。『古事記』では岩戸隠れしたアマテラスを誘い出すために鶏が用いられたとの記述があります。

また、陰陽五行説(世の中のあらゆるものは木・火・土・金・水の要素をもつもので成り立っているという考え)では十二支の「酉(とり)」は五行のうち「金」を意味します。「酉」に通じる「鳥(鶏)」も「金」に

捉えられています。加えて、「金」は「金生水(金からは水が生まれる)」とされます。だとすれば「水」尾というこの地に、「金」

の鳥が埋められていることは、真偽はともかくとして、他の金鶏伝説より、説得力があるものと考えても良さそうです。

なお、盗掘については、死んだかどうかは不明ながらも、同じような伝説が伝えられる古墳(岐阜県多治見市の虎溪山4号古墳)では、金の鳥があると信じた不届き者が盗掘したという痕跡が残っていることから、伝説を否定することもできかねません。

渡邊綱屋敷跡

『雍州府誌』という江戸時代に成立した山城国（京都府南部）に関する初の総合的・体系的な地誌において、「水尾の里に、渡邊綱屋敷跡というのがあって、昔源頼光が大江山へ鬼退治に行く途中、ここに宿泊した」という記述があります。

源頼光とは、清和源氏の三代目の棟梁に当たります。武士団を率いて、摂関家の警護なども務めている一方で、美濃国、但馬国、伊予国、摂津国の国司を務めて、私財を蓄え、時の権力者である藤原道長に莫大な進物を贈ることで、清和源氏の地位を向上させています。

頼光は『今昔物語集』や『御伽草子』などで丹波国大江山での酒呑童子討伐や土蜘蛛退治の説話でも知られています。

大江山の酒呑童子退治とは、丹波国大江山にて暴れまわった夷賊を家臣らとともに討伐した史実が伝説化したものと考えられています。

渡邊綱とは、源頼光の家臣であり、渡邊綱、坂田金時（金太郎）、碓井貞光、卜部季武の四人の家臣を「頼光四天王」と言います。

この伝説について、『清和天皇と水尾』ではこのような分析が加えられています。

「大江山の鬼も都までは出ては危いから、時々水尾あたりの美女をかすめていったのではないか。水尾に婦人は宮女の緋の袴をまね

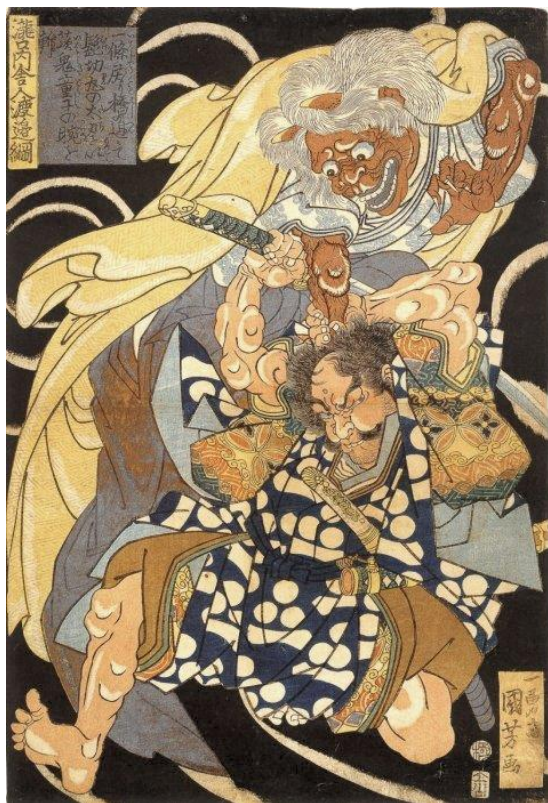
て、赤前垂をしたりなんかする、どちらかといへばおしやれであったので、鬼も目をつけてねらひに来たのかもしれない。それで頼光も丹波へ入る前にまづ水尾へ来て被害の程度や鬼の消息をしらべたのではないか。それでこんな伝説ができたのかも考へられる」

水尾は京から丹波をつなぐ交通の要所であったことはよく知られています。

「屋敷跡」というので、それが単に一時的に土地の者の屋敷に滞在しただけなのか、それとも実際に屋敷があったのかは不明です。

ただ、水尾は当時の貴族の隠棲地であったということ、また綱の主君である頼光が清和源氏の三代目棟梁であったことからすれば、祖先の陵がある水尾を守るために、頼光か綱か、その家臣が水尾に屋敷を構えていたという可能性は十分にあるかと思われま

す。具体的な場所としては、清和天皇社の西北にあるといわれているようです。



源頼光(948~1021)像→
菊池容斎『前賢故実』より
史実からは、頼光自身は武士というよりも中級貴族として摂関家のために働いていたイメージが強い。



← 渡邊綱(953~1025)像
歌川国芳「一條戻り橋の邊にて
髭切丸の太刀を以茨鬼童子の腕を斬」
摂津国西成郡渡辺に住み、渡辺氏の祖とされる。

夜叉ヶ谷の伝説

清和天皇社の中に、小さい祠が3か所ありませんが、それは、かつて地域に点在していたお社を一つにまとめたものと聞いています。その中の祠の一つは、かつて「十羅社（じゅうらしや）」という社に祀られていた神様を祀っていたようです。この十羅という神様に関する伝説が残っています。

貞観の間（859年〜877年）、かつて水尾に念仏寺というお寺があり、そこに住んでいた萬惠（ばんえ）という僧侶がいました。大晦日が明けたころ、若水を汲もうと谷川へ行ってみると、川の辺りに夜叉のような怪しい化け物が手で印を結び水を神仏に捧げているようでした。

萬惠はこれを見て不思議に思い、「おまえは誰だ？」と尋ねると、化け物は「私はこの森に住む十羅です。上の宮（愛宕神社か）、勢至菩薩に水を捧げて、あなたとともにこの世の安全を祈っているのです」と言い飛び去って行きました。

十羅の言葉を聞いた萬惠は神仏に帰依する思いで歌を詠んで、衣の袖を水に浸しながら水を汲みました。

「水尾の清き流をそそぎあげ、神また神に手向けけるかな」

それ以来ここを夜叉ヶ谷といい、この水で体を注ぐと、どんな病人でもたちまち治るといいます。この夜叉ヶ谷から、半丁（約55メートル）ほど下ったところにこの水を使った浴室があったようです。

十羅という神は十羅刹女（じゅうらせつにょ）という十人の女の鬼神です。羅刹というのはヒンズー教の鬼神であり、これが仏教に取り入れられて仏教を守る神となりました。

浴室とは、現在の清和天皇社の鳥居の辺りから小学校の校庭の辺りにあったとされる「御湯殿跡（おゆどのあと）／風呂の前」ではないかと言われています。お風呂場があったと伝えられています。それが、「夜叉ヶ谷から半丁下」ということは、夜叉ヶ谷は今の清和天皇社の辺りと考えることができます。



↑「御湯殿跡／風呂の前」の辺りと思しき場所。



↑清和天皇社にある末社。十羅社・大神宮・春日社・大國社・神明社をまとめたものとされている。

貞純親王について

清和天皇とその孫である源経基（六孫王）については詳しく知られていますが、間の貞純親王についてはあまり詳しく知られていません。

貞純親王とは、清和天皇の第六皇子として生まれ（出生年については諸説あって、八七〇年か八七四年かとされる）、上総守や常陸守や、中務卿・兵部卿を歴任しています。貞純親王は叔父にあたる源能有より武門を継承し武家の法式をたてたとされ、『射礼、射法、射行、射儀、射術』の五冊の本を編集し、「日本弓矢將軍」という名前を許す天皇の宣旨と白い幡を賜っている。そのため源氏のシンボルの白旗はこれに由来しているともいわれています。

清和天皇自身も弟の源能有と並び、武家故実、弓射に通じていたといわれています。水尾から愛宕山へ至る道から清和天皇社の間あたりで「的場」と言われている場所は、天皇に従った武士が弓の稽古をした場所とされています。

貞純親王は、九一六年五月七日に薨去（こうきよ）しています。栗田円覚寺で葬礼が行われ、遺骨は水尾の地に埋葬されたといわれています。ただ、その埋葬された場所がどこかはいまだに不明です。

円覚寺の前に、貞純親王塔と伝わる花崗岩製の宝篋印塔があります。南北朝時代の作とみられています。一六九〇年八月十四日、大雨のため塔の石が壊れて、銅製の墓碑が出土したとき、円覚寺の僧侶はこれを直ちに埋めようとしたが、これを聞いた愛宕威徳院主が後々のために残して摺っておいたようです。

四品常陸太守貞純親王延喜十六年五月七日辛酉薨於桃苑宮十日甲子葬円覚寺安措遺骸于水尾山上

縦七寸四分（約二一・四センチメートル）、横一寸五分（約四・五センチメートル）の大きさになります。一九一五年に宮内省へ上申して地下一・五メートルまで発掘したが、墓碑は出てこず、刷物は関東大震災の際に焼失してしまい、補償金として金十円が下賜されたようです。

また、『清和天皇と水尾』によると、清和天皇陵と谷を隔てて向かい合う山畑の中に古墳の跡があったとのこと。一八九五年一月二〇日、この地の田中熊五郎氏が石灰岩を採掘中に、古い剣や土器が大量に出土されたので、これを宮内省に提出して鑑定を依頼したが、長年の調査の結果「高貴の方の墳墓に非ず」と決定されたが、これらの剣や土器は関東大震災で焼失してしまい、補償金として金二十円が下賜されたようです。



↑ 貞純親王塔（左端）

編集後記

▽今回の歴史調査では、「伝説」という「史実」と判明しにくいことなので、管見、自身の持つ知識と主観に依拠せざるを得なかったです。
▽私は歴史に詳しいとは言っても、歴史学の専門家ではないです。ただ、素人として思うのは、「伝説」に対して「史実」を突き付けて否定するのはナンセンスだと思います。
▽各地にみられる「伝説」は「史実」としての信ぴょう性はかなり低いです。それが信仰者や地域の人々の心のよりどころになっていることからすれば、「伝説」を否定する気にはならないはず。▽地域に伝わる「伝説」とそれに対する想い、これを大切にしていたければと思っております。

参考文献

- ・水尾教育會編『清和天皇と水尾』昭和12年
- ・小笠原清信著『小笠原流』昭和42年
- ・財団法人嵯峨教育振興會編『嵯峨誌』平成10年
- ・竹村俊則『昭和京都名所圖會4 洛西』昭和58年